様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４５２０１５５

研究課題名（和文）明治期から大正期における西洋音楽の独学の研究

研究課題名（英文）The study of self-taught musicians in modern Japan

研究代表者
上野　正章（Ueno, Masaaki）

大阪大学・文学研究科・研究員

研究者番号：００３７９２１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：音楽文化史の研究の進展によって早くも明治中期から大正期において日本各地で西洋音楽の演奏が楽しまれていることが明らかになった。しかし、専門的な音楽家が都市に偏在する当時、地方の人々はいったいどのようにして音楽を学んだのだろうか。
明らかにしたのは、音楽の普及における楽器の独学の重要性である。また、環境整備の重要性である。手風琴やハーモニカの流行の背景には安価な楽器の供給と独習書の活発な出版が認められるように、音楽を独習する環境は人々を楽器の演奏へと誘い、音楽の普及を進展させる。

研究成果の概要（英文）：The progress of the study of music history shows that the performance practice of Western music was very active early in the beginning of twentieth century in japan. Concerts were given even in the rural part of Japan. However, it was very difficult to find music teachers in Japanese countryside at that time. How did country folk learn Western music?
This study elucidates the importance of self-taught practice of playing musical instruments and self-taught circumstances. As behind the harmonica boom was huge amount of publications of self-taught harmonica books and low-price supply of harmonicas, prepared self-taught circumstances induce musical practice, and follow the diffusion of music.

研究分野：音楽学

キーワード：ヴァイオリン　ハーモニカ　通信教育　遠隔地教育　独学　独習　近代日本　音楽

１．研究開始当初の背景

近年の洋楽研究の進展によって徐々に判明しつつあるのが、地方都市における西洋音楽の実践である。驚くべきことに、早くも明治後期から大正期において、日本各地で西洋音楽の営みを見出すことができる（拙稿「明治期末の松江市における音風景について―楽隊の普及との関連から」等を参照）。他方、同時に指摘できるのは、地方において人に教えるほど洋楽器を流暢に演奏することのできる人は、数少なかったということである。特に町村部などでは皆無に等しく、西洋音楽に堪能な宣教師や、師範学校や高等女学校の教員程度しかいなかった。浮かび上がってくるのは、人々はいったいどのようにして西洋音楽を学んだのだろうかという疑問である。

ここで注目したのが音楽の独学である。はたして洋楽器が独習できるのだろうかという思い込みや、誰かに習ったに違いないという先入観を捨てる必要があるのではないだろうか。

この仮説に基づいて、音楽の普及における独学の役割を明らかにするために試みたのが、大日本家庭音楽会によるヴァイオリンの通信教育の研究である。現在では邦楽分野の企業活動で知られている会社であるが、20 世紀前半の日本においては西洋音楽と日本音楽の通信教育事業を積極的に展開していた。

研究の結果明らかになったのは、テキストとヴァイオリンのセット販売による通信講座が大正期から昭和前期にかけて大流行し、各地の人々が講義録を頼りにヴァイオリンを練習していたということであった。また、その学習内容はヴァイオリンによって邦楽を楽しむ心得を身に付けるというユニークなものであった（拙稿「大正期の日本における通信教育による西洋音楽の普及について大日本家庭音楽会の活動を中心に」を参照）。

これらを踏まえて総合的な研究を試みるべく立ち上げたのが、近代日本における音楽の独学の研究である。

２．研究の目的

音楽の独学の解明において設定したのが、次の３つの目標である：1.地方における西洋音楽の情報の入手及び楽器と書物の流通の解明。2.独習書と通信教育の講義録の内容の評価。3.独学の学習効果の検証。

つまり、まず、社会における財とサービスの流れに注目して、独習者がどのような環境で音楽を学ぶのかということを明らかにし、次いで、独習のためのテキストを精査することによって、何がどの程度教えられるかということを明確にし、最後に、これら独習のためのテキストを使って実際に独学を試みることによって、実際に独学が可能かどうかということを評価するという試みである。

３．研究の方法

1. に関して、最初に行ったのは、どの時代のどの地域をターゲットにするかということの決定であった。なるべく効率よく研究が推進できる事例から研究を始め、徐々に複雑なケースの研究を試みるという方法が合理的である。

これに関して役に立ったのが、2005 年度から継続的に行ってきた地方都市における音楽文化の研究である。調査を行ってきた山陰地域、北陸地域、北海道地域に注目し、鳥取市、札幌市及び新潟市を選択した。そして、地方紙にどのように西洋音楽が報じられ、特に独習書や楽器が宣伝されたのかということを調査した。鳥取市に関しては大正期の『鳥取新報』と『因伯時報』の記事、新潟市に関しては明治中期の『新潟新聞』の広告、札幌市に関しては、明治後期から大正前期の『北海タイムス』である。

また、あわせて注目したのが、通信販売である。明治 5 年に早くも全国的な郵便制度が布かれ、これを利用した通信教育や通信販売が積極的に行われたことはよく知られている。このチャンネルを使って楽器や独習書も販売されたのではないだろうか。

丸善、三省堂、博文社など様々な書店が早くも明治期から書籍の通信販売を行っているが、散逸が目立つ。資料が入手しやすく、長期間に亘って発行され、音楽関連の書物が充実しているという観点から青木嵩山堂の書物の通信販売目録を研究対象に定め、収集し、独習書に関する書物のタイトルを抽出し、独習書の出版状況を明らかにした。

その他、業界誌の『楽器商報』のバックナンバーを 1950 年から 20 年分調査し、明治期の楽器の販売状況も明らかにした。

2. に関して最初に試みたのは、独習書の布置を明らかにする作業である。銀笛、吹風琴、手風琴、ヴァイオリン、マンドリン、ハーモニカ等々、近代日本では非常に多くの楽器が流行り、廃れ、物によっては定着するという歴史的経緯を辿っている。国立国会図書館デジタルコレクション等を参考に過去に発行された独習書の出版状況を調査していった。明らかになったのは、ハーモニカの独習書の大量出版である。発行タイトルも発行部数も他の楽器を凌駕する。

これを踏まえて、ハーモニカの独習書の内容の調査を行った。図書館で閲覧したり、購入したりして独習書を収集し、奏法に注目しつつ記述を分析していった。

3. に関しては、大日本家庭音楽会のヴァイオリンの通信教育の講義録を使用して実際に独習を試みることにした。まず行ったのが、ヴァイオリンの購入である。わざと予備知識なしに楽器店に出かけ、適当なものを購入し、これを用いて講義録の練習を開始した。初めはビデオに撮る予定であったが練習に集中できず、録音に切り替えて練習を続けた。また、ハーモニカに関しては手元に置き、ときどき演奏することによって楽器に馴染むことを試みた。

４．研究成果

１．鳥取市と新潟市と札幌市の状況を調査したが、鳥取市と新潟市に関しては十分なデータを得ることができなかった。他方、満足な成果を得ることができたのが札幌市であった。札幌市のリーディングペーパーの『北海タイムス』には、書店の富貴堂が積極的に書物や楽器の販売を推し進め、西洋音楽の独習環境が構築されていく状況が克明に記録されていた。解明されたのは、音楽文化の振興における地域の書店の果たす大きな役割である。なお、この研究成果は、「明治 40 年代の札幌市における楽器、蓄音機、レコードの普及について 西洋音楽の独習環境を考える」というタイトルで、日本音楽学会の全国大会で発表を試みた。

２．青木嵩山堂の販売目録の分析からわかったことは、まず、1. 販売地区は広く日本全土をカバーしていて、代金を支払えば書物が入手できるシステムが明治 20 年代中頃にすでに成立していたということであった。また、2. 明治中期から大正初期の全ての期間に亘って販売目録には独習書のタイトルが充実していて、時代毎に推移する傾向があるということだった。もっとも、3. 青木嵩山堂が出版している書物に関しては比較的長い期間入手可能であった。青木嵩山堂の楽器の独習書の大量の出版は、高田知子が「明治期の関西における手風琴の流行」（『音楽研究』第 11 巻大阪音楽大学）で指摘しているが、仮説として示されるのは、大量出版と通信販売との関連である。独習書の普及において通信販売はこれまで考えられてきた以上に大きな役割を果たしたのではないだろうか。

その他、業界誌の『楽器商報』を参考に、黎明期の楽器の販売状況を調査した結果明らかになったのが、明治期における楽器の普及に通信販売が大きな役割を果たしていたことであった。

３．明治初期から昭和前期に出版されたハーモニカの独習書を収集して記述を分析した結果、先ず判明したのが、独習書の記述が徐々に複雑になり、高度な奏法が解説されるようになっていくことであった。例えば、明治後期から大正中期は初歩的な楽器の操作法程度の記述が認められるに過ぎない一方、大正期以降に発行された独習書ではベース奏法に関する記述が加わるようになり、昭和前期に発行されたものは、ベント等のジャズの特殊奏法や様々な重音を奏する方法などの奏法が紹介されるようになる。

また、独習書の発行部数の調査から判明したのは、昭和期における特定の独習書による市場の寡占である。例えば、西山啓吉，井上喜市共編『ハーモニカ活法』は発売後 10 年で 19 刷、川口章吾『ハーモニカの学び方』は発売後 6 年で 80 刷という驚くべき発行部数を示す。提案されるのは、独習書の寡占は奏法の標準化を促したという仮説である。

４．明治後期から大正期において人々がどのように楽器の独習を行ってきたのかということは非常に解明が難しい研究課題であるが、大日本家庭音楽会の受講生のための雑誌『家庭音楽』のバックナンバーを発見し、その中から大正 11 年に発行された第 84 号と第 85 号に掲載されたヴァイオリン学習体験記を見出し、学習の実態を明らかにすることができた。ごくわずかの人々だと考えられるが、大日本家庭音楽会の通信教育を通じてヴァイオリンが演奏できるようになり、職場の音楽家、村の音楽家として演奏活動を行い、西洋音楽を広めた事例を見出すことができた。あるいは、非常に多くの人々に当てはまると思われるが、難しくて投げ出してしまった事例も確認することができた。

５．なお、楽器を独習し、その過程を記録し、これを分析する試みは、ヴァイオリンで行ったが、目立った成果を得ることができなかった。ヴァイオリンの独習は難しく、予定の通りに上達することができなかった。

もっとも、発想を変えて、ハーモニカは手近にハーモニカを置いてこれに親しむ、気分転換に演奏するという方法を取ってみたところ、それなりに演奏できるようになった。楽器を独習しやすいような環境にすることによって、独習が成功したのかもしれない。事例を収集した段階で研究期間は終了してしまったが、これを独習環境とのかかわりにおいて再検討することを今後の課題として考えている。

６．研究成果は報告書として出版した。資料編も作成し、研究過程において収集した楽器等の販売カタログを復刻した。CiNii（NII 学術情報ナビゲータ）に目録データが掲載され、広く研究成果を活用できる状態になっている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 4 件）

①『鳥取新報』と『因伯時報』から見た大正期の鳥取市の音楽文化について―西洋音楽愛好家の活動を中心に―、2012 年 11 月 11 日、東洋音楽学会（国立音楽大学）

②How sound recording was integrated into the lesson of musicalinstruments? Focusing on the Dai-Nihon Katei Ongaku Kai、2014 年 8 月 23 日、International Council for Traditional Music（奈良教育大学）

③明治 40 年代の札幌市における楽器、蓄音機、レコードの普及について 西洋音楽の独習環境を考える、2014 年 11 月 9 日、日本音楽学会（九州大学）

④大正期の通信教育教材でヴァイオリンを

独習する試みについて、2014 年 11 月 23 日、東洋音楽学会（四天王寺大学）
〔図書〕（計２件）
(1)上野正章、上野正章、明治期から大正期における西洋音楽の独学の研究　科学研究費補助金基盤研究（C）に基づく研究成果報告書、2016、100
(2)上野正章、上野正章、明治期から大正期における西洋音楽の独学の研究（資料編）科学研究費補助金基盤研究（C）に基づく研究成果報告書、2016、174

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
該当なし

６．研究組織
(1)研究代表者
上野正章（UENO MASAAKI）
大阪大学・文学研究科・招へい研究員
　研究者番号：００３７９２１５

(2)研究分担者
（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

　研究者番号：